様　式　Ｃ－４１

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 １８ 日現在

機関番号：１４６０２
研究種目：奨励研究
研究期間：2020～2020
課題番号：２０Ｈ００７６４

研究課題名　　子どもの資質・能力をみとる教師の専門性を高める写真の活用法及び記録性に関わる研究

研究代表者
松田　登紀（Matsuda, Toki）

奈良女子大学・附属幼稚園・教諭

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　450,000円

研究成果の概要：本研究では、保育実践における写真の特性を明らかにし教師の専門性向上に寄与することを目的とした。
その結果、写真は現実を再構成して提示する表現でありその表現は現実そのものではないこと、観者の経験や内的思考により見え方が変化すること、が明らかになった。また保育実践者が「撮影する」行為は(1)保育実践における新しい行動様式である、(2)「不介入な行為」としての身体性をもつ、(3) 写真を用いた記録に時間的構造をもたらす、(4) 保育実践をインデックス的に切り取る可能性がある、(5) 保育実践者の内省を促す、(6)「リフレクション・イン・アクション」に通じる、ことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
近年、教師の専門性を高める研修や日々の保育の振り返りに写真の活用を推進する動きがある。
本研究で明らかにした①そもそも写真という媒体はどのような特性をもつからこそ保育実践や研修への活用が有効であるのか、②保育実践の営みにおいて、これまでになかった「撮影する」という行為が、保育実践に、実践者自身の思考のプロセスにどのような影響をもたらしているのか、という研究成果は、今後の教師の専門性を高めるための研修デザインや実践におけるＩＣＴ活用の在り方について一定の方向性を提示していると考える。

研究分野：幼児教育・保育学

キーワード：写真　幼児教育　省察　記号論　教師の専門性

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1．研究の目的

近年、教師の専門性を高める研修や日々の保育の振り返りに写真の活用を推進する動きがある。そこで本研究では、保育実践における「写真」という媒体の特性を明らかにすることを目的とする。これにより、複雑で曖昧な保育実践を「写真」という媒体で切り取る行為や、「写真」を媒体とする対話によるリフレクションの構造についての理解を促し、「写真」を活用することによる教師の専門性向上に寄与したい。

2．研究成果

（1）保育実践における「写真」という媒体の特性

①メディアとしての写真

保育実践者が保育実践を撮影するまさにその行為が起こる動機の多くは、感情や直感を論理にする内省である。持続する保育実践にひとまとまりの意味を保育実践者自身が感じること、それが動機となり保育実践は撮影され、意味を含むメディアとして写真が生み出される。

②写真の情報量と認識―写真は現実ではない

写真とは現実ではなく、観者が見る時点ですでに撮影者が再構成した表現、である。撮影者が身を置くその場所から得ている情報量と、写真で見る情報量では明らかに異なる。それは写真には距離感や手触り、関係性など身体性が含まれていないからである。

③見る・読む・語る―写真の開放性

写真とは常に「何かの写真」である。「この写真は何を表現しているのか？」と問われている時、撮影状況の文脈や身体性をもたない観者の出しうる答えは観者の中にある。写真は、撮影者の心の動きから意味づけられた表現であると同時に、写真を見る観者側の経験を通して読まれるという性質ももつ。「この写真は何を表現しようとしているのか？」という記号的読み取りは、写真を見る側に文脈理解という負担を強いることになり、結果的に写真の実践文脈と切り離して自己内理解することが求められるのである。写真とは観者に開いた瞬間からその理解は観者に委ねられるものであり、観者の身体性、つまり観者のそれまでの経験や観念というフィルターを通して読み取られ理解される。

④保育のインデックス化

写真は特性として「インデックス性（写真が現実の痕跡であるという記号的性質のこと）」[1]をもつ。写真が「見える化」のための、見せるためのものとなるに従い、そのインデックス化は進む。

⑤写真の時間性

写真により提示される二次元の画像は「瞬間」ではあるが、それを撮影する身体には、保育実践中にシャッターを押すだけの過去からの文脈があり、そして写真を見る現在の語りには「かつてそこにあった」保育のひとまとまりの意味を、現在から意味づけることとなる。

（2）保育実践において保育実践者が写真を「撮影する」行為のもつ意味

①保育実践における新しい行動様式―「撮影する」

保育における写真活用の推進は、写真行為である「撮影する」という、これまで保育実践の中にはなかった行動様式をもたらした。これまでは保育実践者が保育実践の中の小さな感動や気づきとして感知し心に留めていただけで、行動としては現れなかった保育実践の中にある内的思考に付随し、新しい行動様式として「撮影する」という行為が加わったのである。

②保育実践の中で「撮影する」身体性がもたらす後ろめたさ-「不介入な行為」

保育実践者の援助の方法は多種多様で、保育実践者は専門性として、どのような自分の行為も人的環境として子どもや遊びに影響を及ぼしているという意識をもつ。しかし、保育実践者は子ども理解や遊びの援助など、同時進行的に思考し行動するため、「撮影する」という行為のために、遊びから、遊びの援助を支える思考から一旦離脱する必要がある場合もある。撮影はたった一瞬のこと、そう考えるかもしれないが、実はその「撮影する」という行為が保育実践者の「後ろめたさ」として、「撮影する」瞬間も、そして写真を見るたびに見過ごされそうな感情ではあるにしても思い起こされるのである。

ソンタグ[3]は「写真撮影は本質的には不介入の行為である」としている。身体的に「介入する人間は記録できないし、記録している人間は介入できない」のである。しかし保育実践における身体性という視点から考察すれば、「撮影している保育実践者」としての身体性は子どもと共有することとなり、保育実践においてはむしろ身体的に介入しているとも言えるのではないか。

③写真の時間的構造が生む写真提示の妥当性や信頼性

写真は保育の「見える化」「可視化」としてのエビデンスの一つとして位置づけられているが、「撮影する」その瞬間に保育実践者が感じ取っていたことが、その後の保育実践の積み重ね、及び子どものアセスメントによって写真で表現する物語そのものが変わっていくことは、「写真はできごとのたんなる記録ではなく、それ自身が、シャッターがおされる以前には現実のどこにも存在しなかった、一つのあたらしいできごとなのである」[4]ことを、撮影する保育実践者は理解しておく必要がある。それ故に写真を提示するだけでは記録の「妥当性や信頼性を高める」[5]ことにはならない。

④写真のインデックス性

先行研究の中には、好ましい保育実践写真として「読み取りやすさ」を求めた具体的な場面を提示するよう求めたものが見られる。しかし、これは写真論に基づけば、「写真の自立性を脅かすインデックス性（写真が現実の痕跡であるという記号的性質のこと）」[1]を強めていることに他ならない。保育実践の中で目的は何であれ、保育実践として「良い写真」が無意識のうちにインデックスとして蓄積されていく可能性がある。保育実践者がもつ「写真的視覚」が限定されてしまうことは、目の前の子どもを見失い、これまでの経験から想起される子どもの育ちやコンテンツのインデックスに当てはめてしまうことや、保育実践の多様性を妨げることにならないだろうか。

⑤写真の性質としての「内省」―自己との対話

実践者が保育実践の現象を「撮影する」ことで切り取って残しておこうと意識する際には、これまでの保育実践では行われなかった思考の様式が発達しているのではないか。それは、保育実践を切り取る際には必ず直観的に何かを感じとって切り取っていることからも証明できる。

撮影は保育実践者が子どもの何らかの育ちをみとり、心が動いた際に行われている。それは、「撮影する」ことで育ちが見えるように感じられる写真もあれば、コメントが加えられることで意味をもつ写真もある。どちらにしても、保育実践者がこれまでの遊びや子どもの育ちの物語りをすでに構築しており、その物語りとの「ズレ」を感じ、再構成するようなみとりが得られそうな感覚であること、子どもの主体性が発揮され子ども自身の遊びになっていることで教師が保育実践と物理的な距離が取れていること、がきっかけとなり、「撮影する」行為が現れている。一方で写真の中には保育実践を1日を通して見れば、または長期的に子どもの育ちを振り返ってみれば、何か意味が見出せるのではないか、という、いわば保険的な写真、も存在する。

このことから保育実践者の「撮影する」行為は、瞬時に自分の中にある物語りとのズレを感じることで自己と対話し、体験から学んでいる行為と言える。その意味では保育実践中に「撮影する」行為は保育実践者の専門性向上には有効であると考えられる。しかし一方で「撮影する」行為には自己との対話を生み出さない保険的な写真の可能性もあるということを実践者は自覚する必要がある。ただ単純に「撮影する」行為が自己との対話を生み出すのではなく、保育実践者がこれまでの遊びや子どもの育ちの物語りをすでに構築していること、そしてその物語りとの「ズレ」を感じられること、加えてその「ズレ」をもって物語りを再構成していくことが重要であり、このことが保育実践者の専門性を高めていくのである。

逆説的に言えば、保育実践者が撮影した写真について言語化することで、無意識的なみとりとのズレに気付き、自覚化することで次の実践での援助が変容する、ということもあり得る。保育実践を「撮影する」ことにより、その保育実践はすでに過去のものとなり、主体から距離を離していく。そうして「撮影する」ことによって切り取られた保育実践は「現実を反映しているのではなく、再構成し、提示している」[6] 表現へと形を変えていくのである。つまり、保育実践者は「撮影する」ことで保育実践を切り取り、自身がどのようなことに興味をもち評価し、視点を推移させたのか、ということと向き合うことになる。

⑥保育実践の専門性としての即興的判断と「撮影する」こと

保育実践者の高度な専門性でもある時間にして一瞬のうちに状況を認識して判断する行為は、「一方ではある出来事の意味を、他方ではこの出来事を表現する、視覚的に知覚されたフォルムの厳密な構成を、ほんの一瞬のうちに、同時に認識することである」[7]「撮影する」という行為と同質であることが、保育実践で「撮影する」行為が受容されている一因であろう。「撮影しよう」とする感覚は、保育実践において「身体が着眼している事実」があり、身体がその事実に接し、そこに意味を見出しているから、ボタンを押して「撮影する」行為となる。その瞬時の、状況や関係性を察知して何かを捉える「リフレクション・イン・アクション」[8] に通じる行為こそが、「撮影する」という行為を後押ししているのかもしれない。

文献

1 前川修(2019)イメージを逆撫でする 写真論講義 理論編.東京大学出版会.9
2 石田英敬・東浩紀(2019)新記号論.ゲンロン.22
3 スーザン・ソンタグ 近藤耕人訳(1977)写真論. 晶文社.20
4 西村清和(1997)視線の物語・写真の哲学.講談社選書メチエ.40
5 文部科学省(2019)幼児理解に基づいた評価.チャイルド本社.59
6 レン・マスターマン(1995)「メディア・リテラシーの 18 の基本原則」メディア・リテラシーを学ぶ人のために. 鈴木みどり編.世界思想社.297
7 アンリ・カルティエ＝ブレッソン(2004) アンリ・カルティエ＝ブレッソン写真集成.岩波書店
8 ドナルド・A・ショーン(1983)柳沢昌一・三輪健二監訳(2007)省察的実践とは何か-プロフェッショナルの行為と思考.鳳書房.

主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 松田　登紀	４．巻 16
２．論文標題 保育実践において保育実践者が写真を「撮影する」行為のもつ意味	５．発行年 2020年
３．雑誌名 教育システム研究	６．最初と最後の頁 39-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 松田　登紀
２．発表標題 保育者の専門性と写真に関する記号論的考察
３．学会等名 第74回　日本保育学会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

○全国国立大学附属学校連盟幼稚園部会　長崎大会　研究集会提案　　2021年 「新しい生活様式の中での幼児教育におけるICTの活用について」

研究組織（研究協力者）

氏名	ローマ字氏名